B11-1

慢性期重度脳外傷患者における ボツリヌス療法とリハビリテーション

○高澤 太郎[1]、村山 竹美[1]、山口 美佐子[1]、萩原 千春[1]、内野 福生[2]、小滝 勝[2]

[1]自動車事故対策機構 千葉療護センター リハビリテーション科、
[2]自動車事故対策機構 千葉療護センター 脳神経外科

【はじめに】千葉療護センターでは平成23年11月よりボツリヌス療法を施行し、平成25年3月末まで9症例に対し31回行った。症例選択およびリハビリテーション経過について報告する。

【対象】上肢4例、手指2例、下肢6例の9名（男性6名・女性3名）。年齢15歳～63歳（平均31歳）。受傷経過年数は1年4か月～5年1か月（平均2.6年）。選択条件は、対象肢に指示動作があり、筋緊張緩和により日常生活動作の改善が予測される症例とした。

【方法】対象筋は担当療法士が選別し医師が最終決定した。ボツリヌス投与後3日間は、通常訓練の他に他動的関節可動域訓練を1日3回各30回以上施行した。評価は4週毎に痙縮、関節可動域測定、観察を行った。

【結果】全症例で筋緊張が緩和し可動域が改善した。効果は1回目が著明で2回目以降は維持の傾向が強かった。上肢は目的動作が出現したが、手指は物品操作の改善はみられなかった。下肢は特に足関節が改善し、立位・歩行訓練が可能となった症例もあった。日常生活動作は上肢に比べ下肢で改善が著明だった。また、座位姿勢の改善もみられた。

【考察】対象症例は、多彩な高次脳機能障害を呈しており、訓練の阻害となっている。特に上肢は自発性の低下で日常生活上の使用頻度は少ない。巧緻動作は上肢と手指が連動し、末梢ほど複雑な動きが必要になるため日常生活動作の改善には至らなかったと考える。足関節は移乗など荷重をする機会が多く、また、装具併用で長時間の両肢位保持が可能になることで立位・歩行が改善したと考える。筋緊張の緩和により本人の過剰努力が軽減し座位姿勢改善にもつながった。